# 「横浜文化論」的前書

なぜこのとくしゅうをしたのか

この特集をするにあたって，つぎのような問題を考えていました。

まず「文化」という言葉のあいまいさに困るわけですが，ここでは「文化」＝芸術・教育活動などや，その施設という狭い意味だけではなく，都市とその都市に住む市民生活の内容・構造などを含む，いわば「都市としての文明のレベル」として広い視点で考えたいと思います。

ところで，よくいわれるように，かって，開港以来の栄光にみちた日本の海外文化摂取の窓口であった横浜は，百数年の歴史のなかですっかりその影を消してしまいました。影を消したというよりは，明治・大正・昭和の三代を通じて変化してきたのでしょう。その変ぼうのプロセスが，日本の近代史とどう見合うかもおもしろい問題だと思いますが，それはともかく今日では，いわゆる文化密度の高く強力な東京に吸収されてしまい，いわば東京周辺文化として，横浜における不毛がなげかれております。三割自治・三割文化が横浜の実態なのでしょうか。

そこで，横浜の都市としての現実と将来の見通しを考えてみて，横浜という都市は本当に将来とも文化が不毛なのか，それとも国民経済の大きな視野からみれば首都圏内の周辺文化として東京に従属するのも当然なのだとも考えるものです。その場合，周辺文化といっても，中央線沿線・東北線沿線と京浜地帯ではまたそれぞれ特色があるでしょう。

一方では宿命的従属論ではなく，衛星都市化がすすんでいくなかで，自己完結的なものでないとしても，地域的独自性を確保できるし，またそうした創造の可能性があるとも考えられます。むしろ，今日のとうとうたる文化の全国的規格化のなかで，積極的に地域文化の独自性をもつべきだという主張もあります。その場合，当然横浜の文化のにない手の変化，すなわちハマッ子にかわって流動的な新しい市民層が，はたしてそのにない手になれるかという疑問もでてきます。こうしたことはまた，国民文化論と地方文化論とのかかわりあいにまで発展する問題でしょう。

一方，横浜文化を都市構造の変化からみても，かつていわゆる横浜文化の中心であった港の位置は，大正，昭和のなかで大きく変化しています。自然海岸線はつぎつぎに工業地帯に変ったし，かっての堀川は埋立てられてしまいました。横浜という都市は埋立てをぬき

にして考えられない埋立都市文化ですが今日ではこの埋立てが横浜文化を滅亡させてきたともいえます。しかし，港湾都市というのは，世界史的にも独自の文明を築いてきたものですが，横浜において将来そうした港のもつ文化的役割はなくなるでしょうか。それとも，新しい港湾文明の役割を横浜につくりあげることができるでしょうか。

さて，以上のような疑問のなかにつぎのようなことも考えます。それは，いわゆる横浜文化といった場合のイメージについてですが，かつての文明開化からひきつがれた安易なエキゾチシズムが一面ではかなりの要素を占めているのではないかと思います。横浜文化というと，そうしたイメージのなかで,横浜というとせいぜい南京街とか元町であり,文化的遺産というかり物の三渓園，そして横浜浮世絵について語られるだけであります。たしかに，横浜文化はそうした海外文化の窓口としての意味，悪くいうと植民地的な文化をぬきにして考えられません。しかし，私たちが継承すべき祖先の遺産はそれだけでしょうか。横浜の住民が開港以前からもっていたもの，また開港百年のなかで市民が自からの汗でつくりあげたものはなかったのでしょうか。そうしたことから横浜の歴史についても再評価してみる必要があると思います。たとえば，港を中心にした文化について語られることが多いのは当然としても，港北・保土ケ谷・戸塚といった周辺農村部も横浜市であり，そこにはやはり農民文化が存在していたはずであり，それを無視することはできません。そこでの古いまつりと新しいまつり<団地文化>についても考えねばなりません。

ともあれ，こうした問題点のうえにたって，横浜の文化について論議さるべき多くのものがあると思います。たとえば京浜工業地帯がもっていた労働者の文化活動は，日本のプロレタリア文学のなかでユニークなものがあったはずですし，それがいまどうなっているかということは，今日の職場文化活動の問題につながってくることでしょう。また，横浜における産業文化についても再検討してみるべきでしょう。たとえば，中小企業と地域文化との関連も重要なテーマの一つです。

また，今日，横浜の都市の未来像として，「国際文化管理都市」という言葉を使っていますが，その中身をどうつくっていくかが問題です。そして生活環境に関する都市施設は，およそ文化的とはいえない水準におかれている現実を考えねばなりません。象徴的には，根岸湾から眺めた銀色に輝く石油プラントのメカニズムと，その背景にくすんでみえる三渓園，そして横浜の郊外地に無秩序に広がる住宅群とその環境水準の低さ，この三つをどう考えるかということにもなるでしょう。

現在の横浜の都市構造の激しい変ぼうのなかで，私たちが過去の伝統を正しく生かしながら，新しく創造していくべき横浜の都市の文化はいかなるものであり，いかなる方向に向かうべきなのか，自由にして大胆な議論を展開すべき責任が私たちにあるでしょう。

私たちは少なくとも，横浜の新しい都市づくりと，それにふさわしい横浜の文化について，絶望的とは考えたくないのです。それを，とうとうたる現代文明の標準化，規格化のなかで，それになんとか抵抗したいと考えるものなのです　　<鳴海正泰>